

# 固有種ニホンイシガメ個体数調査に参加して

長野市茶臼山動物園 高田 孝慈

## 1. 参加の動機

私は茶臼山動物園でカメ類の飼育に10年以上携わってきました。そのカメの中にニホンイシガメもいたのですが、動物園で展示や繁殖に力を入れているカメはたいてい外国産のカメで茶臼山動物園のニホンイシガメも展示場のすみっこでただ、日本固有のカメが減っています、守っていきましょう。とそれらしい看板が取り付けられていただけでした。動物園では外国産のめずらしい動物やかわった形のした動物が来園者には人気があり、カメの展示でも大型のゾウガメやワニガメなどが来園者の目を惹き、日本産の動物はどこか片隅に追いやられている感じです。

しかし、昨今の動物園では地元の動物たちにスポットを当てた展示に力を入れています。そのような中、ニホンイシガメにもスポットがあたるよう保護を訴えた看板を制作しましたが、自分で制作していてもどこか辞書から引っ張ったような文章で説得力のないことを感じていたおり、今回この調査のことを知り応募させていただきました。

## 2. 調査での気付き

ニホンイシガメが減っている理由の中で、水質の汚染や護岸工事のための生息環境の減少はどちらかというとイメージしやすいものでしたが、外来カメとの競合や新たな捕食者、アライグマの問題は私の中では厳密にはどのようになって減っているのか分かりにくいものでした。今回の調査に参加させてもらったことで、先生から解説を受けたり実際に傷ついたカメや死骸を発見し実感がわくものになりました。

アライグマがミシシippアカミミガメよりニホンイシガメやクサガメを捕獲しやすいのには、カメたちが冬眠や休息をするときの水深に理由がありました。ミシシippアカミミガメは、アライグマに襲われないようアライグマが手探りで探せないほど深い場所で休むのに対し、ニホンイシガメにはそのような動物に襲われる歴史がなく、浅い水深の藪などに隠れておりあっさり捕まってしまうということでした。更に捕まったときでもミシシippアカミミガメはしっかり肢をしまって口を開けて抵抗するのに対し、ニホンイシガメはアライグマに揺さぶられると頭や肢を出してしまい、そこから喰いちぎられてしまうのも理由の一つでした。



調査の計測の様子



土手にたくさんあったカメの死骸

### 3. 調査内容で得た知識を応用した動物園での普及活動と来園者の反応

茶臼山動物園では4月15、16日「春の動物園まつり」にてイシガメブースを設置し、調査の報告を中心にしたニホンイシガメの展示。7月26日～8月31日には夏の企画展「がんばれ！イシガメ！」展を開催することができました。

春の動物園まつりでは、調査で教わったことを中心に個体数調査のやり方やイシガメの現状をポスター掲示し解説しました。生体のイシガメとクサガメを比較展示し、来園者の気を惹きつけて興味の持ち方次第で浅い話しから深い話しを仕分けてみました。個別に多くの方と話すことができ、一番聞いたことは野生のカメを見たことがないという話しでした。動物園や神社、公園の池などで見たことがあるという方が殆どで、野生のカメを見るというのは難しいことなんだなということが改めて分かりました。見たことがないものを数が減っていると言われても実感も沸くはずがなく、当然保護の意識に向くものではないと思われ、啓発活動がよりいっそう必要なものだと感じました。

「がんばれ！イシガメ！」展では4m×4mほどの敷地にイシガメの生息環境を再現しイシガメを展示しました。カメは水の中ばかりにいる訳ではないことを解ってもらおうと、畑のエリアや陸地を広くとり、田んぼや池も制作しました。カラスやタヌキといった天敵の剥製（今回アライグマは用意できませんでした）、U字溝のようなカメにとってはトラップになってしまう物も設置し、来園者に訴えかけられるものにしました。また水槽展示で、日本で見られるカメ、動物園の役割としてワシントン条約違反により保護しているイシガメ類や日本の動物園で守っていかようとしているカメの展示も行いました。

来園者の反応としては広いスペースのどこにイシガメがいるのか探そうと必死に見てくれる方々が多く注目されました。今回感想ノートを設置したのですが、

「絶滅危惧になっているカメさんがたくさんで悲しく感じた。私たち人間がカメさんをちゃんと守っていけるようとりくみたい!!」

「- 小動物と側溝 - と - イシガメの生息調査 - 興味深く読みました。アライグマがカメを食べることをはじめて知りました。びっくりしました。」

「カメはあまり好きではなかったけど、歩くところを見てちょっとかわいいとおもいました。勉強になりました。」

など好意的な感想が殆どでした。



職員手作りの企画展看板



企画展内の様子

#### 4. 自身の体験を伝えることによる来園者への学びの影響と自身の感想

カメ自体はもともと人気の高い動物で、来園者にも好きな方が多いのは分かっていたが、カメはどのカメもカメであってあまり見分ける気持ちがない感じを今回の企画展で受けました。今回のイシガメ展はイシガメ科に特化し、9種類の殆どがイシガメ科でした。動物の愛護という意味ではどのカメも等しく守ってあげることが正しいのかも知れませんが、今回の保護という目的でのカメ展示において理解してもらえたのかどうか、深く掘り下げるところまで行けなかったのが、今後の反省点になりました。

この度の貴重な体験や指導をしてくださったおかげで今回の企画が実体験を通して伝えられるものとなりました。本当にありがとうございました。



イシガメの展示場、手前の水槽にも魚と一緒に仔ガメがいます。